光明寺だより

第99号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る詩

お世話をかけました

東京都　内田　毅　55

墓参りに行く途中
亡き父母に
かける言葉を
ふと思う
「お世話になりました」かな
いや違う
「お世話をかけました」だ

産経新聞「朝の詩」より

新春特別法座

１月９日（水）

午後４時

【講師】備後教区・光徳寺前住

藤田徹文先生

一口法話

無義をもって義とす

梯實圓和上さん（1927～2014）の「念仏には無義をもって義とす」（歎異抄第十条）と題した、ご法話を紹介します。

・・・・・・・・・・・・・・

「無義をもって」の「義」は「はからい」ということです。

お浄土へ生まれるのには悪いことをやめて善いことしなければならないのではないかとか、汚い心を抑えて、清らかな心にならなくてはいけないのではないかと、私たちが自分の頭で考えて、判断を下すこと、それを「はからい」と呼びます。

その人間の知識でもって仏さまのお救いをはかり知ろうとすることを「義」というのです。そういうお前の判断をまじえるな、ということを「無義」と言われたのです。

あとの「義とす」の「義」の方は正しい本来の意味ということです。

つまり、「お念仏は、私のはからいをまじえないで仏さまの本願のお救いを素直に受け取ること、それが正しい受入れ方である」ということです。

他力の念仏というものは、阿弥陀さまの仰せの通り「助けるぞ」と言われたら「助けて下さる」と受け入れればいいのです。

死ぬんではない、限りないいのちの世界に生まれて往くんだと思いなさい、これが阿弥陀さまの願いです。だから「そうでございますか。私は何もわかりませんけれども、あなたの仰る通りに、私は死ぬのではなく生まれていくのだと思い取らせていただきます」と、一遍言うてみて下さい。

「そうか私は死ぬのだと思っていたけれども、あれは死ではなく人間の世界の終りだっただけだな。私に臨終はあるけれども死はないのだ」と一遍言うてみて下さい。全然違います。

私には人間としての終りはあるが死はない。私には限りないいのちの領域に包まれ、限りないいのちの領域に溶け込んでいくのだ。そんな世界があるのだ。

阿弥陀さまがそう仰って下さるのですから、その言葉をすっと受け入れた時、私の心に新しい秩序が出来上がっていく。

だから、私たちはもうごちゃごちゃ言わないで、ただ阿弥陀さまの仰せを「有り難うございます」と受け入れさせていただくというのが、正しい念仏の受け入れ方、本願の受け入れ方だよという事であります。

・・・・・・・・・・・・・・

演題の「念仏には無義をもって義とす」とは、お念仏の教えのいただき方のことを言ってるのですが、これを和上さんは、「私のはからいをまじえないで仏さまの本願のお救いを素直に受け取ること」と大変分かりやすく解説されています。

お念仏の教えは、阿弥陀さまの仰せをそのまま受け取るだけでいいのです。

「お前を助けるぞ」と仰っているのですから「ありがとうございます」と素直に頂けばいいのです。

「お前は死ぬんではない浄土に生まれるのだ」と仰っているのですから「ありがとうございます」と素直に頂けばいいのです。

私はこう思うなどとごちゃごちゃ理屈をこねるのではなく、ただただ阿弥陀さまの仰せを素直に頂けばいいのです。

全くその通りでありますが、悲しいかな煩悩にまみれた私たちは、その仰せを「ハイ分かりました。」と素直に受け取れないところがあるのです。「そんな簡単なことで本当に大丈夫か」という疑いを持つのです。これが「はからい」です。

そんな疑問に答えるようなお話が『歎異抄』第九条にあります。

ある時、弟子の唯円坊が親鸞聖人に心の内を訴えるのです。

「お師匠様、いくらお念仏を称えても心か

ら喜べません。また浄土へ生まれたいという心も起こりません。どうしたものでしょうか」と。

すると親鸞聖人は、「私もこの不審があったが唯円もそうだったのか」と申され、次のように答えられています。

「よくよく考えてみたら、本来なら喜ばなければならない尊いみ教えに出遭いながら喜べないのは全く煩悩のせいです。また急いで浄土に参りたいという心も起こらず、ちょっとした病気でもすると、もしや死んでしまうのではないかと心細くなったりするのも煩悩のせいです。

そんな愚かな私たちのことをとっくの昔に知りつくした上で（仏かねてしろしめして）、『だからこそ救わずにおれないんだよ』と、私たちのために用意して下さったのが本願のお救いなのです。

浅ましい我が身のことを思えば、ますます阿弥陀さまの本願のお救いをたのもしく仰がれ、往生は間違いないことだと思います」と答えられたのです。

ここで注目すべきことは、「仏かねてしろしめして」というお言葉です。

つまり私が求めるに先立ってすでに仏さまの方で救いの法が用意されていたということです。

この仏さまのお心に気づかされる時、「あぁ、そうでしたか。もったいないことです。」と、素直に仏さまの仰せをいただくことが出来るようになるのです。ここが大事なのです。

また、法然聖人（親鸞聖人の師）の場合を見てみますと、聖人がお念仏の教えに帰依されるに至ったのは『観経疏（かんぎょうしょ）』の一文によるものでした。

その文言を要約すれば、「お念仏一つで往生成仏できるのは、『仏さまの約束ごと』（順彼仏願故）だから」というものでした。

つまりこちらから求める前に、すでに、このこと（私が救われること）は、仏さまによって約束されていたことなんだということです。

万巻の経典を読み尽くしても、なお悟ることが出来なかった聖人が、この片言隻句で鮮やかに回心され、念仏往生の教義を確立されたのです。

重ねて申しますが、求める前にすでに仏さまの方で用意されていた―この仏さまのお心（大悲心）を知ることが、お念仏の教えを頂く上でまことに大事なことなのです。

学ぶべきは仏さまのお心―「学仏大悲心」―なのです。

阿弥陀さまは、「お前を仏にする」と誓って下さっているのです。これは仏さまの「約束ごと」ですから、万に一つも狂いはありません。この世のいのちといっているものが終われば、必ず間違いなく、仏にさせていただくのです。

ご法話に「私には人間としての終りはあるが死はない。私には限りないいのちの領域に包まれ、限りないいのちの領域に溶け込んでいくのだ。そんな世界があるのだ。」と仰っています。まさに私の「いのち」は光り輝く浄土に生まれ、仏になる「いのち」なのです。

阿弥陀さまの仰せを素直に頂くことによって恵まれるお念仏の尊さです。

まことに有り難いことです。　合掌

秋の『彼岸会法座』開催！

９月 28 日（金）午後 2 時より、季平博昭先生をお招きして秋の彼岸会法座を開催いたしました。
今回は、本山の実践運動の一つ、連研（連続研修会）で話し合われるテーマの一つ「お浄土とは何ですか」ということについて、先生ご自身が月刊誌『大乗』に執筆されたものを参考にしながらお話を頂きました。２０名の参拝がありました。

【講演主旨】

お浄土とはどういう世界でしょうか？

色々な答えが返ってきそうですが、「この世の縁が尽きた時、生まれる世界」というのが一般的な答えだと思います。親鸞聖人もご門弟にあてられたお手紙の中で「お浄土で必ず必ず待っています」と仰っています。ですから私もこの世の縁が尽きたら生まれさせていただく世界をお浄土だといただいています。ただ、お浄土は極楽浄土と言われてきたように、この言葉の持つイメージから、「今は苦しいが、来世では何不自由ない暮しが出来るのだから今を耐えていこう・・」と現実世界の矛盾をあきらめさせるような役割を担ってきたように思います。肝心なことは、浄土に生まれるということは「仏」とならせていただくということなのです。ですから今の自己中心的な生き方の延長に浄土があるのではありません。

浄土は親鸞聖人は「つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり」と示されていますように、阿弥陀さまの智恵と慈悲のはたらく世界のことです。私たちは、この「ハタラキ」に照らされ包まれる時、自分本位にしか生きられない私の姿に気づかされ、私の苦しみを共にして下さる阿弥陀さまのお心を支えとして、お互い支え合いながら生きていく私へと育てられていくのです。

慈悲は抜苦与楽と言われるように、苦しみを抜き、楽（幸せ）を与えるものです。阿弥陀さまは苦しむ者をご覧になられて、「こんなことで苦しんでどうするんだ、もっと元気を出せ」と叱咤激励をして、その人の苦を抜こうとするのではなく、「あ―辛いだろうね。苦しいだろうね、分かるよ分かるよ」と苦しむ者に寄り添って、共に悲しみ、共に苦しんで下さる、同悲同苦のお慈悲をお持ちの仏さまなのです。苦しむ者にとって、苦を共にしてくれることが、何よりも、苦しみを乗り越えていく大きな力になります。

また、お浄土は「広大にして辺際なし」といわれるように無限大の広さを有する世界です。ですからお浄土はこの私のいる娑婆世界を包み込んで、私を励まし、支え続けて下さるハタラキの世界です。

お浄土はやがて生まれ往く「いのち」のふるさとであると同時に、今を生きる私のよりどころとなって下さるハタラキなのです。

平成３１年度行事予定表

日　時	行事名	講　師
１月０９日（水）午後４時	新春特別法座	備後教区光徳寺前住・藤田徹文師
１月１６日（水）	正月参拝	
３月１５日（金）午前９時	涅槃会	
３月２２日（金）午後２時	彼岸会法座	大阪教区法栄寺前住・小林顯英師
８月１３日（火）１４日（水）	新盆合同追悼法要	
８月１６日（金）	お盆参拝	
９月27日（金）午後２時	彼岸会法座	備後教区法光寺住職・季平博昭師
12月上旬予定	報恩講	未定
１２月３１日（火）	除夜会・元旦会	

盆・正月（１月１６日・８月１６日）はお寺参りとお墓参りの日です。

行事の追加・変更は本紙にてお知らせいたします。

余間

遺族が傷ついた言葉

家族を看取った人が、周囲の不用意な言葉に傷ついているという実態が医療機関の調査で分かりました。

回答の多かった順に記載しますと・・・

①興味本位の詮索

「一緒に住んでいたのに（病気に）気づかなかったの？」

「がん家系なの？」

②無理して頑張っていることに気づかない言葉

「意外に元気ですね」

「もうそんなことができるくらい（悲しみが癒えたのね）になったのね」

③価値観を押しつけるような言葉

「もっと大変な人が他にもいます」

「辛いのはあなただけじゃない」

④死別による「よい面」を強調する励まし

「自由になったね」

「旅行にも行けますよ」

⑤金銭面の質問

「保険金はもらえた？」

「遺族年金はいくらぐらい？」

くれぐれも無神経な言葉遣いには気を付けたいものです。

趣味の広場

俳句を楽しむ（七十八）

森本隆を

今年は冬の気配が遅く、珍しいくらい秋日和の日が続きました。これを書いている十一月中旬でも山野の紅葉はまだ色着きがわずかです。さて4号前の96号から始めた「平成俳句の総括」という思いつき企画もいよいよ今回で最後となり、残った季節「秋」の句から何句か勝手に取り上げさせていただきます。春や夏のように開放的で活発といったイメージの季節とは異なり、厳しい冬という季節を迎える前の秋は静寂で落ち着いた雰囲気に包まれ、俳句も抒情的で内面的、静かで感覚的な作品が多いのは否定できません。

雨雲の崩るる匂ひ芒原（すすきはら）　森賀　まり
秋立つや藍におぼるる浅間山　長谷川　櫂
秋のくれ旅ゆくごとく本屋まで　鳴戸　奈菜

爽やかで清涼な秋の季節感を、前二句は自然の景物を素直に詠みとめて表現し、三句めは自分の心の中の季節感をうまく表わしていて、いずれも解り易く読者に優しい句です。一句めの作者の森賀まりさんは新居浜出身の女流俳人で、ご主人の田中裕明さんが”伝説俳句の貴公子“と称され将来を大いに期待せれていたのですが、先般四十五歳という若さで亡くなられたことは大変残念なことでした。

風の音聞くに耳ある良夜（りょうや）かな　岸本　尚毅
秋思（しゅうし）われ雨の音にも目覚めけり　村越化石

この二句はともに聴覚によって秋の季節感をとらえ、そのまま読者の聴覚に訴えてくる、しかも心の奥深い所の思いをも表わしました。

遠き日を戻して回す木の実（このみ）独楽（ごま）　高橋悦男
桐一葉（きりひとは）して何事もなかりけり　倉田　紘文
秋風や草の中なる水の音　深見けん二
色鳥の枝を離れぬしづけさよ　岩田　由美

前二句は、自分の心と静かに向き合い、回想したり安堵（あんど）を覚えたりした、作者の心模様の句です。後の二句はわずかな自然の物音から、そして逆に全く音のない静けさから、それぞれ秋を感じ取っています。

赤松の幹にちからや秋彼岸　片山由美子
水は地をけづりてすすむ鰯雲　今瀬　剛一
天はいま宴の如し鷹柱（たかばしら）　大垣水一路

いずれの句も作者が自分自身の目でしっかりと見た自然界のある一瞬の景物を力強く表現し、そのまま読者にに伝えている句です。「鷹柱」とは、タカやサシバの群れが南をめざして渡る、そのタイミングをはかって上昇気流をとらえて多数の鳥が柱の様に集まり上をめがけて昇りゆくさまを言う語です。

亡き妻の残る目薬秋深し　小西　領南
金婚のけふを妻なき吾亦紅（われもこう）　有働　瞭

秋は物思う季節とよく言われてきましたが確かに他の季節と違って、何かにつけ感傷的になりしみじみとした気分になります。この二句について、趣旨はともに先になくなられた奥様をテーマとしていますが、単に思い出を読んだり思いを述べただけの句ではなく、自分の心情に季節を重ね合せて文学作品に仕上げている点はさすがと言わざるを得ません。「秋深し」、「吾亦紅」と、絶妙の季語の配置はなかなか真似出来る技ではありませんね。一句めの小西領南先生は西条在住で、結社の主宰として俳誌も発行され、長年多くの俳人を指導されて来られた我々の誇るべき郷土の先輩俳人であることもご紹介しておきます。

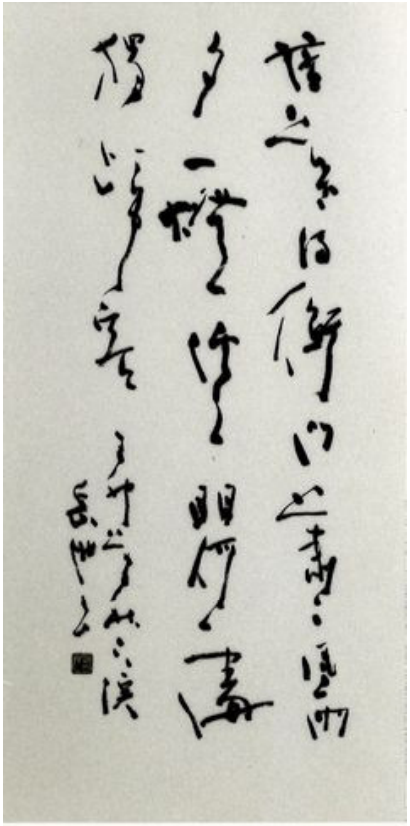
平成も終り近く、ごく大ざっぱにまる一年かけてこの平成俳句を眺めてきました。個人の好みの押し付けに終わったかも知れませんが皆様のご寛容に期待し、今年のまとめと致します。何かと気忙しい年末、皆さまには安全に、そしてお元気にお過し下さい。又、来年。

住職書作品

字句　落葉滿衡門　蕭々風雨夕　一燈渓上明　何處獨歸客

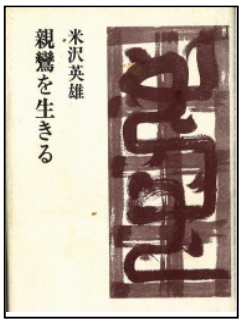
意味　隠者の門に落ち葉が積もって物寂しい風雨の夕
一つの灯が渓水の上を照らしている
独りどこへ帰ってゆくのか旅人の姿が見える

蘇伯衡の句



BOOK　本

『親鸞を生きる』



発行所　弥生書房
著　者　米沢英雄
定　価　1800 円＋税

著者の米沢英雄（1909～1991）氏は福井県で開業医を営むかたわら親鸞聖人の教えに深く帰依され、多くの著述や全国各地での法話・講演などを通してたくさんの念仏者を育ててきました。本書は珉光院（大谷派寺院）での４回の講演記録をまとめたものです。

講演では仏教の教えを誰もが「なるほど」と納得できるように話しておられます。

たとえば、・・・「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし」とあるが、如来大悲とは宇宙万有すべてのものが、私一人を生かすために夜昼はたらき通し。このはたらきを如来大悲というのだ。自分の力で生きているのではない。生かされて生きている。如来大悲の恩徳のただ中に生かされて生きているのが分かったのを信心という・・・

まことに分かり易い解釈です。

光明寺のホームページ

南岳山光明寺　検索

平成３１年度年忌早見表

該当家に年忌通知表をお配りしていますが、念のため早見表を参考にご自宅の過去帳でご確認ください

回忌	死亡の年号
1周忌	平成30年
3回忌	平成29年
7回忌	平成25年
13回忌	平成19年
17回忌	平成15年
25回忌	平成　7年
33回忌	昭和62年
50回忌	昭和45年
66回忌	昭和29年
100回忌	大正　9年
150回忌	明治　3年
200回忌	文政　3年
250回忌	明和　7年
300回忌	享保　5年

言葉のプレゼント

私に誰かの悪口を言う人は
誰かに私の悪口を言っています

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください

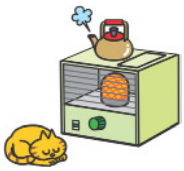
★次回発行予定…1月下旬

話題

★9月28日（金）午後2時、秋の彼岸会法座を季平博昭先生をお招きして開催いたしました。20名の参拝がありました。（＊関連記事5ページ）

★県の事業で東予地区の名建築を紹介する小冊子が発行されますが、光明寺も掲載される予定です。

★12月6日（木）ご講師に西条組長・高橋恭敬師（心光寺住職）をお招きして、報恩講を勤修いたします。演題は「生死出ずべき道」です。

★除夜の鐘は例年通り12月31日午後11時45分頃より撞き始めます。

★住職の長男が本年7月23日、無事誕生いたしました。「光（ひかる）」と命名しました。最近は顔を見てはよく笑ってくれます。光明寺24代目住職になります。